

十津川温泉誌 — 温泉地としての歴史と現状 —

河 本 大 地 奈良教育大学社会科教育講座（地理学）
劉 丹 奈良教育大学大学院在学
馬 鵬 飛 奈良教育大学大学院在学

Geography and History of Totsukawa Onsen (Hot spring) in Totsukawa Village, Nara, Japan: History and Present Situation as a Hot Spring Resort

KOHMOTO Daichi

(Department of Geography, Nara University of Education)

Dan LIU

(Graduate School of Education, Nara University of Education)

Pengfei MA

(Graduate School of Education, Nara University of Education)

Abstract

History and present situation of Totsukawa Onsen, one of the three hot spring resorts in mountainous Totsukawa Village, Nara Prefecture, is examined in this paper. Totsukawa Onsen is a new hot spring resort that was established in 1963 when hot spring water was taken from the source in a steep valley to the lakeside of newly constructed Futatsuno Dam in Hiradani area where is the center of the commercial and service business function of Totsukawa Village. Managements of the accommodation facilities are specifically focused. As a result, it can be said that the development of this onsen made a great contribution to the economy of this village through tourism industries.

キーワード：温泉，観光，山間地，宿泊施設，十津川村

**Key Words: Onsen, Tourism, Mountainous Area,
Accommodation Facility, Totsukawa Village**

1. はじめに

1.1. 目的と背景

本研究の目的は、奈良県吉野郡十津川村にある3つの温泉地のうち十津川温泉について歴史と現状をまとめ、今後の地域の在り方を考えることである。特に宿泊施設の経営に焦点を当てる。『十津川村史』編纂のための調査事業の一部として報告する。

農山村地域では、人口減少や高齢化によって産業の衰退や地域コミュニティの機能低下が起こり、長年にわ

たって地域の活力低下が大きな課題となっている（鬼塚，2015）。この点は、かつて林業を中心産業としていた十津川村も例外ではないが、温泉等の地域資源に恵まれており、観光産業を発展させることが未来を築くひとつの道となりうる。村瀬（1997）は、「山村地域においても、中核産業である林業の停滞等のため、観光レクリエーションの発展を促進することが重要な課題となっている。ところが、山村地域は一般的に資本が少なく、観光資源の不足するところもあって、その観光的発展は容易に実現できるものではない」と述べている。しかし野

本（1968）は、「観光開発の一手段として、温泉源を開発することにより、温泉集落が観光基地としての性格づけを、ますます強くしている傾向がみられる」としている。

この点について、藤本（2000）は、「十津川村は特定農山村、振興山村、過疎、半島地域に指定され、陸の孤島と言われるほどの山村である。しかし豊かな自然、温泉、文化遺産に恵まれ、訪れる観光客は年間25万人、内宿泊客8万人と推定されている」としている。十津川村は1960年代から、国道168号線の開通などを契機に、本格的な温泉観光地化を目指してきた。後述するように「国民保養温泉地」の指定を受け、「源泉かけ流し宣言」を発表し、温泉観光地として発展を遂げようとしてきた。

しかし、全国的に旅館業経営は厳しい状況下にある。小森（2010）は、全国の温泉地の宿泊キャパシティの状況について、「宿泊施設数は1995年のピークを過ぎ減少しているものの1万5000軒台をキープしている」「宿泊利用人員は1992、96年の1億4300万人台をピークに1億3500－4000万人のレンジで停滞している。全国的には温泉地が疲弊している状況を示していると考えられる」と指摘している。

一方、近年の観光動向において、インバウンドツーリズム（訪日外国人の観光）は無視できない。2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界文化遺産として登録され、その構成資産のひとつである熊野参詣道（熊野古道）「小辺路（こへち）」の通る十津川村への観光客が、特に外国人に関して増えている（河本・劉・馬，2018）。2017年の日本の訪日外客数は2869万人に達し、JNTOが統計をとりはじめた1964年以後、最多となった。今後、十津川村への外国人観光客の増加も考えられる。

しかしこうした中、十津川温泉の温泉地としての歴史と現状をまとめた文献は存在しない状況であった。

1.2. 方法

2017年10月から2019年4月にかけて、十津川温泉のある十津川村大字平谷を繰り返し訪ね、宿泊施設および公衆浴場を中心に経営者や住民等に聞き取りを行った。一部の宿泊施設については、宿帳（宿泊者名簿）を閲覧し、宿泊者の動向を把握した。

関連して文献調査を行った。特に、温泉地としての変化や新旧の公衆浴場について、十津川村役場から毎月出されている『村報十津川』（以下、村報）、および毎年出されている『村政報告書』を参照した。また、観光客の意識と行動について、十津川村役場総務課が2014年8月の約1か月間実施した十津川温泉（平谷地区）観光客アンケートの結果を参照した。このアンケートは、十津川

温泉バスセンター、公衆浴場「庵の湯」・「憩の湯」、各旅館・民宿で設置・回収されたもので、97件の回答が得られている。

2. 十津川温泉郷の概要

紀伊半島には、各所に昔から高温～低温の温泉が自噴や浅い掘削によって得られている（西村，2000）。これらの成分は重曹・塩類泉が多く、硫化水素を含むことも多い。十津川村は、険しい山々に抱かれた川沿いに湯泉地（とうせんじ）温泉（大字武蔵・小原）、上湯（かみゆ）温泉（大字出谷）、十津川温泉（大字平谷）という、それぞれ泉質の違った3つの源泉を有している（図1）。これら3つの温泉地は、1985年に、当時の環境庁から「十津川温泉郷」として国民保養温泉地に指定された。また、2000年4月から2002年3月まで松田忠徳氏が日本経済新聞に連載した「日本百名湯」のひとつにも選ばれた。さらに、2004年6月28日に十津川村は全国初の「源泉掛け流し宣言」を発表した。村内のすべての温泉施設が源泉掛け流しとなっている。



図1 十津川村の概観
地理院地図等を用いて作成。

このうち本稿の主対象とする十津川温泉は、1963年に大字平谷の西部にある上湯川の川原（大字出谷との境界付近）に湧出している下湯（図2の南西部）から、大字平谷の国道168号の通る二津野ダム湖畔（十津川右岸）に位置する垣内（かいと）・蕨尾（わらびお）などの商業・サービス業機能を多く有する河岸段丘上の集落群（図2の中央部）に導湯（引湯）されて成立した、新興の温泉地である。



図2 十津川温泉とその周辺

地図アプリ「スーパー地形」にて地形データと地理院地図を重ねて作成。

十津川村の温泉については、下湯からの導湯による「十津川温泉」成立直前の様子を記した上治（1959）が詳しい。「平谷西方の上湯及下湯、湯泉地付近の湧泉の3ヶ所」を調査した結果、「何れも数ヶ所から湧出し、泉量豊富、泉温30-65℃、泉質単純泉、炭酸泉、重曹泉、硫黄泉など数多ある見込みである」としている。当時は、「湧泉地えは自動車を通じ得るも、調査当時は未だ温泉は開発されるに至らず、十津川峡谷の渓谷中の湧泉であるという外はないが、泉量の多量なること泉温の高きこと、及び峡谷の景観、大規模なる電源開発がスピード的に進行しつつあるなどを総合し、この温泉が開発されて世に紹介されることは近きにありとの感を深かくした」（原文ママ）といった状況であった。

堀井（1961a）の「温泉」の項には、湯泉地（大字武蔵）、上湯、下湯（いずれも大字出谷とされている）の3つが記されている。「湯泉地は古くより湯が湧き出るのでこの地名が生じたもので、湧出量が豊富で、泉質は硫黄泉である。地元の湯槽の外、温泉旅館も設けられ観光客の利用に当てている」とある。一方、「上湯と下湯は共に湯川（筆者注：上湯川のこと）の川底より湧き出るのでこの川の名もそれにちなんでつけられたものである。泉質は上湯はアルカリ泉、下湯は炭酸泉で、簡単なコンクリートの湯槽が設けられている程度に過ぎない」状況であった。

湯泉地温泉の発見は、役行者が十津川の流れを分け入ったところに霊窟があり、薬師如来の住居に相応しい

として加持祈祷を行ったところ、湯薬が湧出したとされる。林（1994, p365）に掲載されている「湯泉地古記録」によると、湯泉地温泉は「宝徳二年（筆者注：1450年）8月7日、地震によって、湯脈が変わり、武蔵のもとに湧出した。しかし、或る時、獵師が武蔵のこの湯を汚したので、湯脈は再び十津川の本流に還った。里人ようやく湯薬の妙を知り、この湯に傷病を医した。天下の貴賤この由を聞き、輦輿丹筏をかりて、この湯に雲集した」。現在、2つの公衆浴場（泉湯、滝の湯）と7つの宿泊施設がある。

上湯温泉は、十津川温泉のある平谷中心部から県道龍神十津川線を西へ「下湯」を經由して約5kmの上湯川沿いに湧く温泉で、享保年間に里人によって発見されたとされる。当時の状況についての記録として、平凡社編（1981）の「出谷村」の項では、畔田伴存が江戸時代に記した「吉野郡名山図志」の「十津川莊西川出谷温泉之記」を引用されている。「丸木橋ありて登り坂有、八町坂と云、峻岨也、嶺有、嶺より八町の下り也、出谷村有、右二行は竜泉寺とて曹洞宗の寺は出谷村より四五丁谷を下り行は左の谷へ入温泉有、出谷の湯と云、湯治人籠小屋壺ヶ所藁葺式間二三間斗、夫より五六間左の山足溪間に温泉湧出而湯壺あれとも外屋なし、湯ハ熱こと湯崎先之湯のこことく竜神の湯よりはるかに熱し、湯治人も来れ共、米価高くして雑用に不堪と云、此所籠屋の下ハ西方出谷川也、水源上湯の川奥山より出て出谷に來り西川ニ合して十津川に入、此川筋出谷温泉より上流にて温泉の

湧出る処四十余ヶ所有、温泉より下にも銀の湯と云有ゆへ二出谷の湯を金の湯と云、此温泉前籠屋より川辺をなかむれハ西の方小山たちかこひ佳景也、四月ころは流の内瀬立に河鹿夥して鳴て聞二堪たり」。当時の出谷川の上流に温泉の湧出する地点が40以上あり、出谷温泉と呼ばれていたことや、すでに湯治人が増えていたため米の値段も高くなったということがわかる。なお、現在、宿泊施設は神湯荘のみ存在し、他に上湯川沿いに露天風呂が設けられている。

以上のように、「十津川温泉郷」と総称される十津川村内の3つの温泉地には、それぞれの特徴と歴史がある。次章からは、このうちの十津川温泉について詳述する。

3. 十津川温泉の歴史

3.1. 導湯前の下湯

十津川温泉は、約300年前の元禄年間（1688年～1704年）に炭焼き職人によって発見されたとされる下湯（図3・図4）から、前述のとおり1963年に旅館や商店の多い大字平谷の二津野ダム湖畔に導湯されてできた温泉地である。したがって、十津川温泉の歴史を記すにあたっては、下湯のみの時期からスタートさせる必要がある。

下湯について、上治（1959）は次のように述べている。「奈良県吉野郡十津川村平谷地内、上湯川の河床より湧出しておる。湧泉地付近の河床は標高約150米河の左岸に1ヶ所、右岸1と2ヶ所共の他河水河礫中に埋没せる温泉2ヶ所にあり、南北100米の間に各所に湧出しておる。多くは河底より湧出しておるから、出水を十分考慮に入れて開発すべきであるが、最北の湧泉は河水面より稍高く僅少の防壁によりて被害を避け得る地点より湧出しておる」。また、上湯川に沿ってN80Wの断層があり、上湯・下湯の湧泉群はその付近にあるとしている。泉温については、「下湯湧泉群の北端の温泉は湧出泉温49℃気温32℃、河水温21℃昭和33年（筆者注：1958年）9月3日、南部は更に高温であると聞くも調査当時河水中にあり不明であった」とし、泉量として「下湯北端の湧泉量は1分間4立と推定、1昼夜5.8軒（筆者注：kl）（約32石）其の他の湧泉を合計して下湯区域の泉量は1昼夜20軒（約110石）以上と推定される。上湯東端の湧泉量は1分間10立と推定、1昼夜14.4軒（約80石）其の他を合計して36軒（約200石）の見込」と述べている。

上治（1959）に掲載された地図は、河川等の形状が明らかに不正確ではあるが、上湯川右岸（下湯の源泉の対岸の下流側）に建物が3棟確認できる。これは、当時存在していた旅館であると思われる。この旅館については、筆者らの調査では「幼少の頃に存在していた」という記憶をもつ高齢者数名に出会えたが、詳しいことはわからなかった。堀井（1961a）によると、1934年（昭和9

年）9月21日の室戸台風の際の玉置山観測所の報告には、「平谷字下湯温泉は暴風雨に伴う山崩れのため温泉旅館は一戸全滅し十才の女子が変死した」とある。したがって、旅館はその後に再建されていたと思われる。

下湯のある上湯川沿いには、森林開発公団林道上湯川線が1956年度から1958年度にかけて整備された（十津川村、1960）。これは現在、和歌山県道・奈良県道735号龍神十津川線となっている。

下湯には現在、「源泉薬師堂」が、図4の十津川温泉中継機械室のすぐ上方に設置されている（図5・図6）。堂内の「薬師様について」と題された看板には、1994年（平成6年）4月吉日付けの「平谷旅館民宿組合献納」による以下の記述がある。

“この薬師様については確かなことは、分らないが、昔、この地で旅館を営んでいた温井吉松氏（慶応元年（筆者注：1865年）5月28日生）が大正の初期から薬師様を祭り、大切に、お守りされていたと伝え聞いている。

爾来、約80余年の歳月を経て現在に至っている。

尚、その間、水害や山崩れなどの災難に見舞われることが度々であった。

現在では、平谷の旅館及民宿の人達が、お祭りをして

いる。”

また、堂内の「御遷宮」と題された看板によると、ここには薬師如来、千手観音菩薩、弘法大師の像があり、施主は平谷温泉利用者組合、施工は電源開発株式会社、大工が亀本工務店、土工が株式会社地案建設であった。また、遷座祭・鎮座祭は2005年（平成17年）4月19日に、竣工奉告祭が同年5月22日におこなわれ、祭司は金光教十津川教会長の原田善哉氏であった。

なお、現在の下湯は、2011年の台風12号による紀伊半島大水害（十津川村、2014）で上湯川の河床が大幅に上がったため、それまでとは異なる、川原の広がる景観となっている（図4）。



図3 下湯にある十津川温泉の源泉
2017年10月8日、河本撮影。



図4 下湯にある十津川温泉中継機械室（左端）と旅館跡と思われる場所（右岸）
2017年10月8日，河本撮影。



図5 下湯にある源泉薬師堂
2017年10月8日，河本撮影。



図6 下湯にある源泉薬師堂の内部
2017年10月8日，河本撮影。

3. 2. 平谷中心部の繁栄と下湯からの導湯事業

下湯から大字平谷の二津野ダム湖畔への導湯の背景に

は、1959年に着工され1962年に完成した二津野ダムの建設がある。同ダムや上流の風屋ダムなどが建設された「吉野熊野総合開発」では、十津川村に約1万人の工事関係者が集まった。この時期、平谷の蕨尾集落は「十津川の銀座（あるいは新宿）」と称されるほどのにぎわいを見せていた。付近の住民によると、当時はスナック等もあって賑やかで、建設作業員が飲酒中にけんかしたり、その後に道で寝ていたりといった状況も多かった。「やくざあがりみたいな人にかわいがってもらった」という思い出を話す住民もいる。また、ダム建設に先立つ1959年8月20日に、紀伊半島の南北をつなぎ十津川村内を縦断する国道168号（五新国道）の平谷～八木尾間の改良工事が竣工した（十津川村役場総務課編，2010）。同年10月22日には和歌山県新宮市までバス路線が開通した。「小原地内からバスで五条まで四時間、奈良へは五時間、また新宮まで三時間足らずで行けるといいうほどになった」（1965年，村報第115号）。

堀井（1961b）には、1959年8月調査による集落構成図が、大字平谷の垣平（かいだいいら）を中心にその東に位置する鈴入・豆市も含んだ図7，その西側の垣内（かいと）を中心に庵之前橋（あんのまえばし）の西岸にある水の本（みずのもと、蕨尾（わらびお）の一部である。泉本は間違い）を含む図9，そのさらに西にある蕨尾の主要部からなる図11について掲載されている。これらはいずれも、「二津野ダムによる水没線」が描かれている。同ダムの建設によって十津川沿いが水没する直前の様子が記されていることがわかる。また、いずれにも「新国道」と「旧道」が記されている。ちょうどこの年、国道168号のバイパスが各集落において開通したのが表れている。いずれの図の「新国道」沿いにも、まだ建物が少ないことがわかる。

図8・図10・図12は、上記の各図に対応する形で1970年の空撮写真を掲載したものである。この時点では既に二津野ダムが完成し、地図の水没線の十津川側が水没し、おおむね河岸段丘の段丘崖より上に集落がある。

一方、十津川村の主産業は林業であったが、「木材需要の低迷によって、林業生産活動は停滞し、林業従事者の高齢化や林業経営費の上昇等により、十津川村の林業を取り巻く環境は厳しいものである」（向平，2011）とされる。このように下湯からの導湯による大字平谷での十津川温泉開発は、道路改良とダム建設が終わり、主要産業であった林業が衰退した後の地域の在り方として、地域資源を活かした観光振興が検討され実現した。

当時の村報には、「導湯工事は技術的にみても大変難しいものであり、村としても初めてのことであるから、慎重な調査と綿密な設計が行われた」（1963年，村報第98号）とある。工事は1962年10月から実施され、1963年秋までに完成した。

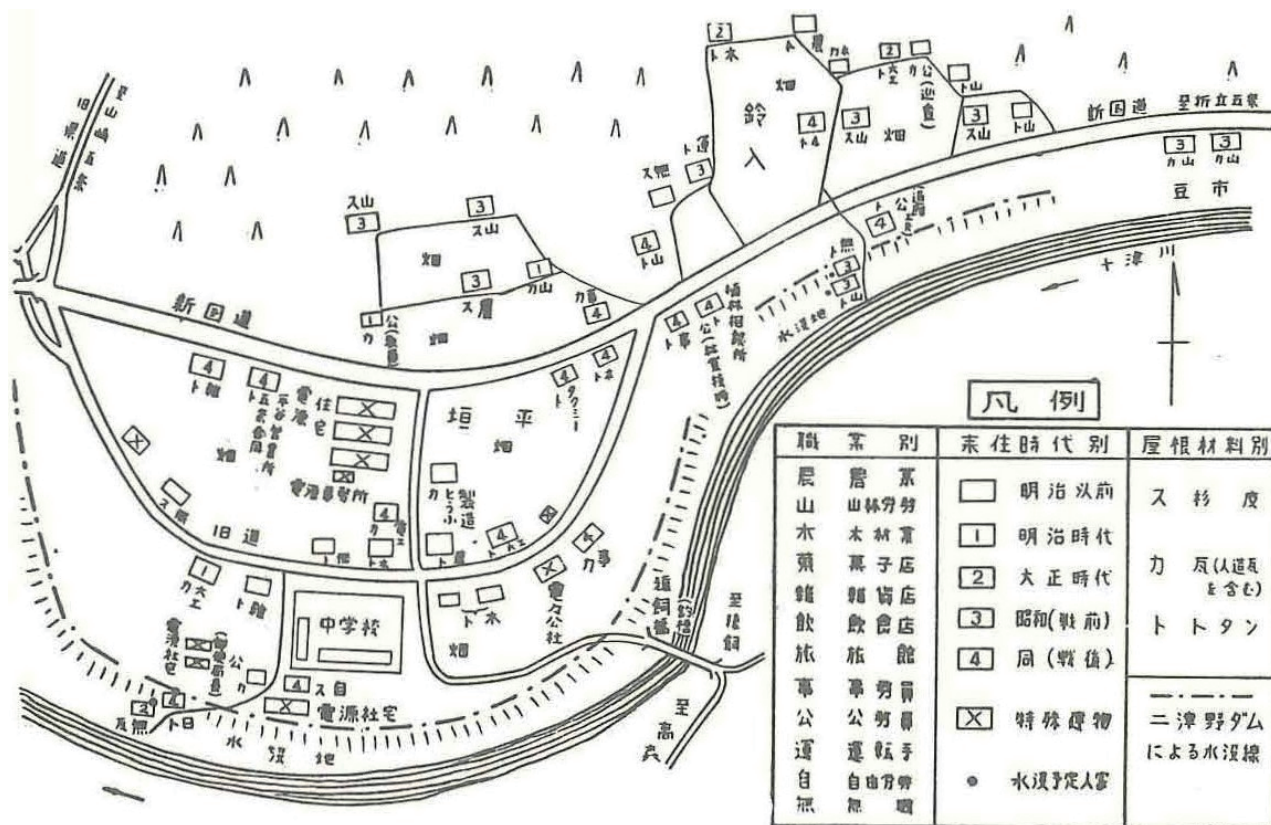


図7 垣平・鈴入・豆市の集落構成図

堀井(1961b)より転載。

図8 1970年の垣平(中央), 垣内の一部(左), および鈴入・豆市(右)の空撮写真
十津川村教育委員会所蔵。

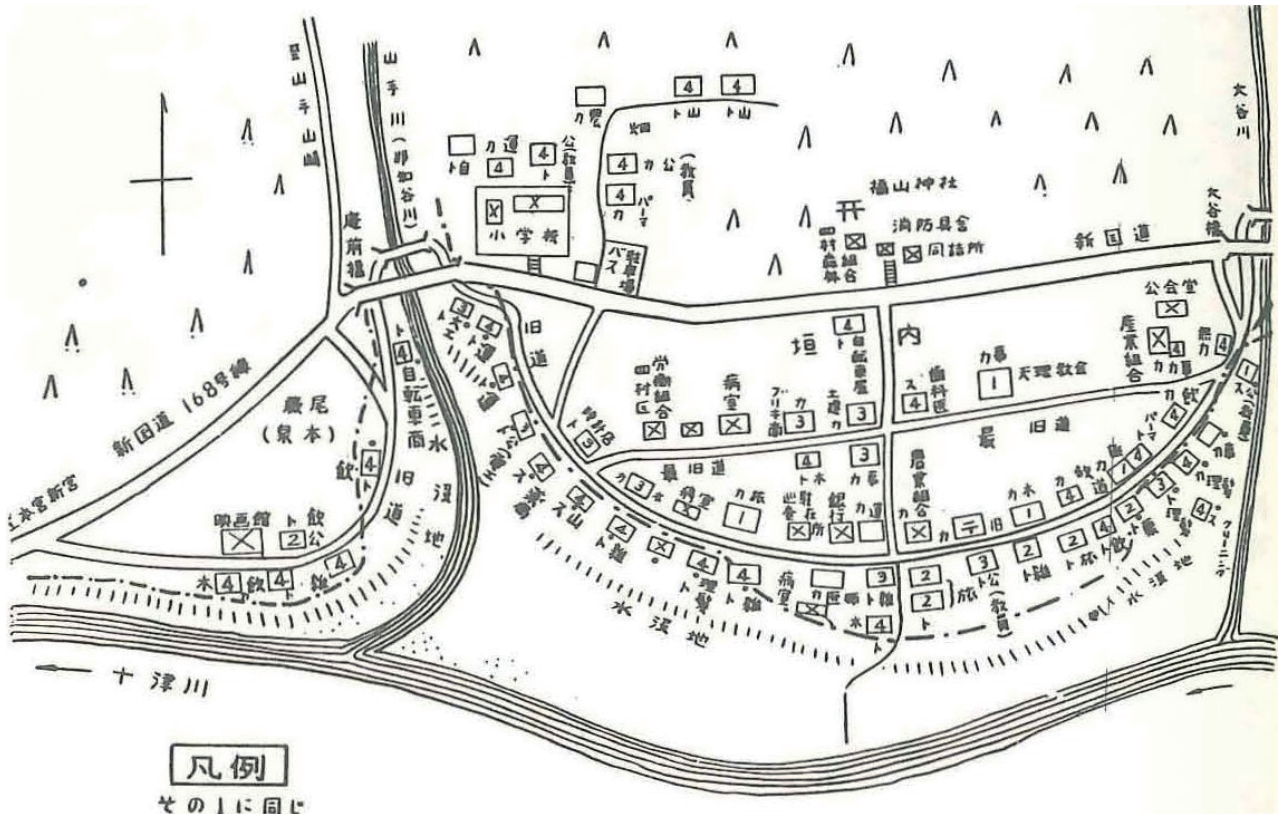


図9 垣内、および蕨尾（水の本）の集落構成図

堀井（1961b）より転載。凡例は図7参照。



図10 1970年の垣内（中央）、および蕨尾（水の本）（左）の空撮写真

十津川村教育委員会所蔵。

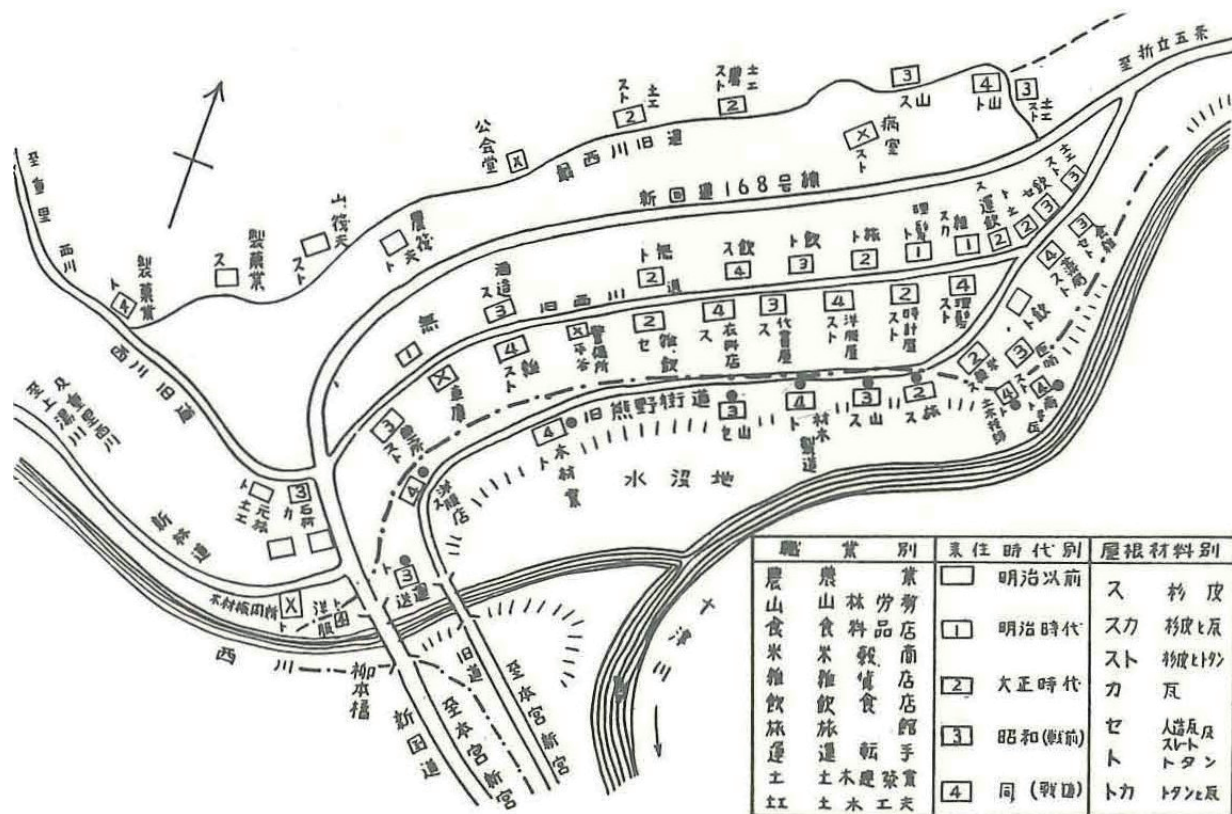


図11 蕨尾主要部の集落構成図

堀井(1961b)より転載。



図12 1970年の蕨尾主要部の空撮写真

十津川村教育委員会所蔵。

3.3. 導湯後の十津川温泉

1963年11月8日には、下湯からの導湯工事が完成したことを祝い、盛大な祝賀式が行われた。その際、この温泉地は「十津川温泉」と命名された。1966年には、当時の奈良県知事であった奥田良三が奥吉野の開発状況を把握するため、7月26日十津川第二発電所、二津野ダムの視察後、十津川温泉に宿泊した。さらに奈良県は県政の現状を県民に理解してもらうことを目的とする「県民代表による県政視察」を実施し、10月26日には視察団が十津川温泉に宿泊した。

1973年3月定例村会では、温泉地としての更なる発展を期して、十津川温泉管理条例が設定された。これは「十津川温泉の管理及び運営に関する必要事項を定める目的で設定され、総則、給湯、使用料、違背処分などが規定されている」（1973年、村報第196号）。同年、十津川温泉事業特別会計も設けられた。1977年には、6月21日の第2回定例村議会で、出合橋から平谷までの送湯管改修工事の第二期工事が決定された。「十津川温泉の第二期工事は、莫大な投資によって順調、確実に完成をみることができ、今後は維持管理の面で利用者とともに有効に活用し、十津川温泉の真価を発揮できる」（1978年、村報第239号）とされていた。しかし、温泉開発は順調には進まなかった。1979年には、不況で宿泊客が減り、旅館によっては土曜日や休日前以外はほとんど宿泊客がないところもあり、利用組合から強く温泉使用料下げの要望が出されていた。そのため9月10日定例村議会で、一口2万5千円から2万円まで十津川温泉の温泉使用料を下げることを決定した。

1980年代に入ると、長期にわたって低迷している林業を支えるべく、観光基本計画（木の世界・十津川郷）が策定され、観光事業を取り入れ温泉を最大に生かした「すばるの郷」等の建設構想が出てきた。さらに観光事業を推進するため、“近畿の保養基地”を目ざし、1984年（昭和59年）、十津川の温泉郷が「国民保養温泉地」の指定を受けるため、奈良県温泉審議会が「十津川温泉郷国民保養温泉地計画書」を審議し、計画の概要を承認した後、1985年（昭和60年）、十津川温泉郷（湯泉地温泉・十津川温泉・上湯温泉）は環境庁が指定する国民保養温泉地になった。

その後、1982年に策定された「十津川村観光基本計画」の中核となる宿泊施設として、「十津川温泉ホテル昂（仮称）」が1988年に着工された。この宿泊施設の建設は、「本村の最も緊急、かつ重要な課題となっている新たな雇用機会の創出と農林業を中心とする既存の地場産業の振興発展、および村民の余暇レクリエーション施設の整備を目的としたもの」（1988年、村報第330号）であった。この事業は、村、観光協会、奈良交通株式会社の三者で新しい会社を設立し進められた。建物のデザインには、

十津川村の山々をイメージさせ、林業の村に相応しいものとするため、木材を大量に使用した。また、料理には地元の野菜、魚を提供し、十津川らしい雰囲気を作ることとされた。ホテル昂（詳しくは後述）は、1989年7月にオープンした。

同ホテルなどが設置された複合施設である「昂の郷」は、平地の少ない村内において、西川の蛇行部分をショートカットし旧流路を埋めて造成された（図13）。



図13 「昂の郷」付近における1974年頃の空中写真と現在の地理院地図を重ねたもの
地図アプリ「スーパー地形」を使用。

2004年には3年間の「十津川温泉整備基本計画」が出された。2004年度の目標については、「国や県の補助金を積極的に取り入れ、露天風呂を有した温泉公園、旅館街の景観整備、観光サイン整備、源泉露天風呂、足湯などの整備を行います。事業費は、村の負担が最小限になるよう、過疎対策事業債も充当していきます」（2004年、村報第514号）と記されている。十津川温泉整備計画が完了すれば、十津川温泉郷が「大きく全国に発信できる観光拠点となり、十津川村が全国のどの地よりも『ホッ』とできる『日本のふるさと』として、PRできます」（2004年、村報第514号）と予想されていた。

2004年6月に十津川村は、十津川温泉郷にある宿泊施設20軒と5力所の公衆浴場のすべてにおいて循環湯を使わない、「源泉かけ流し宣言」を発表した。市町村内の旅館や公衆浴場などすべての温泉施設が「源泉かけ流し」になることは、全国でも非常に珍しい。

十津川村への観光客数は、観光事業の取り組みなどが効を奏して増加・横ばい傾向にある。2007～2017年の観光入込客数は毎年おおむね65万人を超えている（図14）。ただし自然災害の影響を強く受けている。2008年に減少した要因は、五條市大塔町猿谷の国道168号が、10月から土砂崩れのため約1ヶ月間通行止めになったことであった。

2011年には、台風12号による紀伊半島大水害が発生した。8月31日8時の降り始めから9月3日23時まで（以降は欠測）の累積雨量は、約1,130mm（平谷観測所）であった（奈良県総務部知事公室防災統括室，2013）。これにより、下湯で稼働していた十津川温泉2号源泉および十津川温泉7号源泉が全壊してすべての公衆浴場および宿泊施設への導湯がストップしたり、公衆浴場「庵の湯」が浸水したりといった甚大な被害が出た（十津川村，2014）。国道168号線や熊野古道小辺路が被災したことも影響し、十津川村の観光客数は大きく減少した。宿泊施設の多くは、温泉水の代わりに水道水を用いるなどして復旧・復興工事の業者を泊めるなどしたが、観光業は大きなダメージを受けた。

状況を打開すべく、十津川村はさまざまな取り組みを実施した。2011年11月から「復興観光プロモーション事業」等を行い、東京、大阪、名古屋、奈良等で観光客の誘客対策に努め、村や温泉の復活をアピールした。また、小辺路を修復するため、2011年12月からボランティアを集めての「道普請ツアー」を行った。さらに、「被災地温泉施設復旧事業」として、2012年7月23日から2013年3月20日まで、約1億4千万円をかけ、「安定した給湯を行うため、被災した送湯ポンプ室移設と引湯管の復旧工事を行った」（十津川村，2014）。十津川温泉は、地域住民と全国の支援の力を合わせた形で復興してきた。

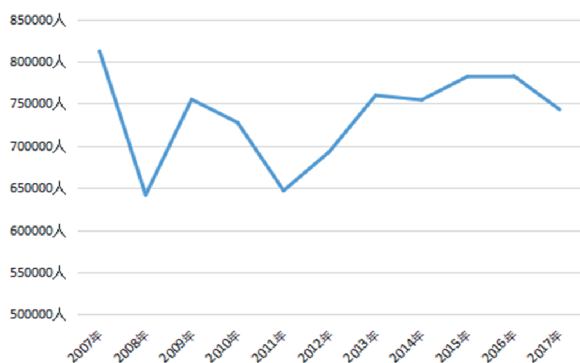


図14 十津川村の観光入込客数（2007～2017年）
村政報告書を用いて作成。

近年、十津川温泉の宿泊者数は、十津川村全体の宿泊者数のほぼ半分を占めている（図15）。宿泊者数の維持・増加には、2015年から奈良県が冬季に奈良県南部に路線バスを利用して宿泊した場合に観光客に路線バス代のキャッシュバックをおこなうキャンペーンをおこなった（2018～19年シーズンは村独自で実施）ことも功を奏している。

なお、2019年6月7日には、下湯の源泉付近の県道735号で土砂崩れがあり、川側の法面にあるパイプ等が破損し導湯がストップした。この影響で十津川温泉の宿泊施

設は2011年以來の開店休業状態となったが、1週間で復旧した。

各公衆浴場および宿泊施設の歴史については、次章で述べる。

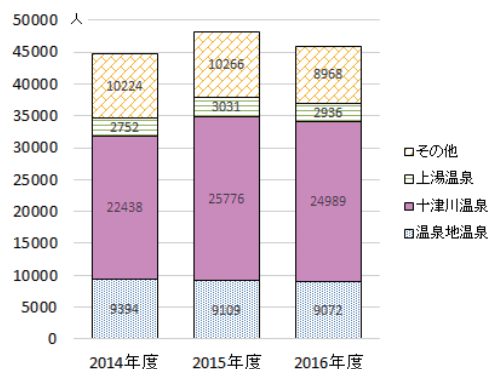


図15 2014年～2016年の十津川村における宿泊者数
村政報告書を用いて作成。

4. 十津川温泉の現状

十津川温泉には現在、公衆浴場3つのほか、旅館7軒、民宿2軒がある。その多くは大字平谷の中心部に位置している（図16）。以下では、公衆浴場・宿泊施設を中心に、観光客、地域づくりの視点も交えて、十津川温泉の現状について述べる。

4.1. 公衆浴場

現在、十津川温泉には3つの公衆浴場（星の湯、庵の湯、憩の湯）がある。いずれも大字平谷に位置している。また、かつては平谷公衆浴場（大字平谷の垣内）とわらび公衆浴場（大字平谷の蔵尾）も存在した。

村が整備した複合施設「昂の郷」にある温泉保養館「星の湯」は、1989年7月に開設された。現在、平日の利用客は10～30人で休日の方が多く、特に日曜は30～50人が利用する。利用者の多い時間帯は夕方、入浴してから自宅に帰る人が多い。平日、休日ともに利用客は地域住民より観光客が多い。70歳以上は無料で利用するため数が多く、1日10人程度が利用する。ただし利用者数減少に伴い、2007年頃に利用可能時間を短縮し、日帰り入浴は12～17時となっている。

憩の湯は、二津野ダム湖畔に1978年4月1日に開設された「南部老人憩いの家」を2000年9月30日までに増改築し、設けられた（図17）。観光客の利用もあるが、主として地域の高齢者に利用されている。後述する廃止された平谷公衆浴場を代替する施設となっている。

庵の湯は、2005年6月2日に開設された公衆浴場である。垣内集落にある十津川バスセンター等の国道168号向かいの二津野ダム湖畔にある。奈良県で初めて整備された飲泉場を有する。地域住民よりも観光客の利用が多

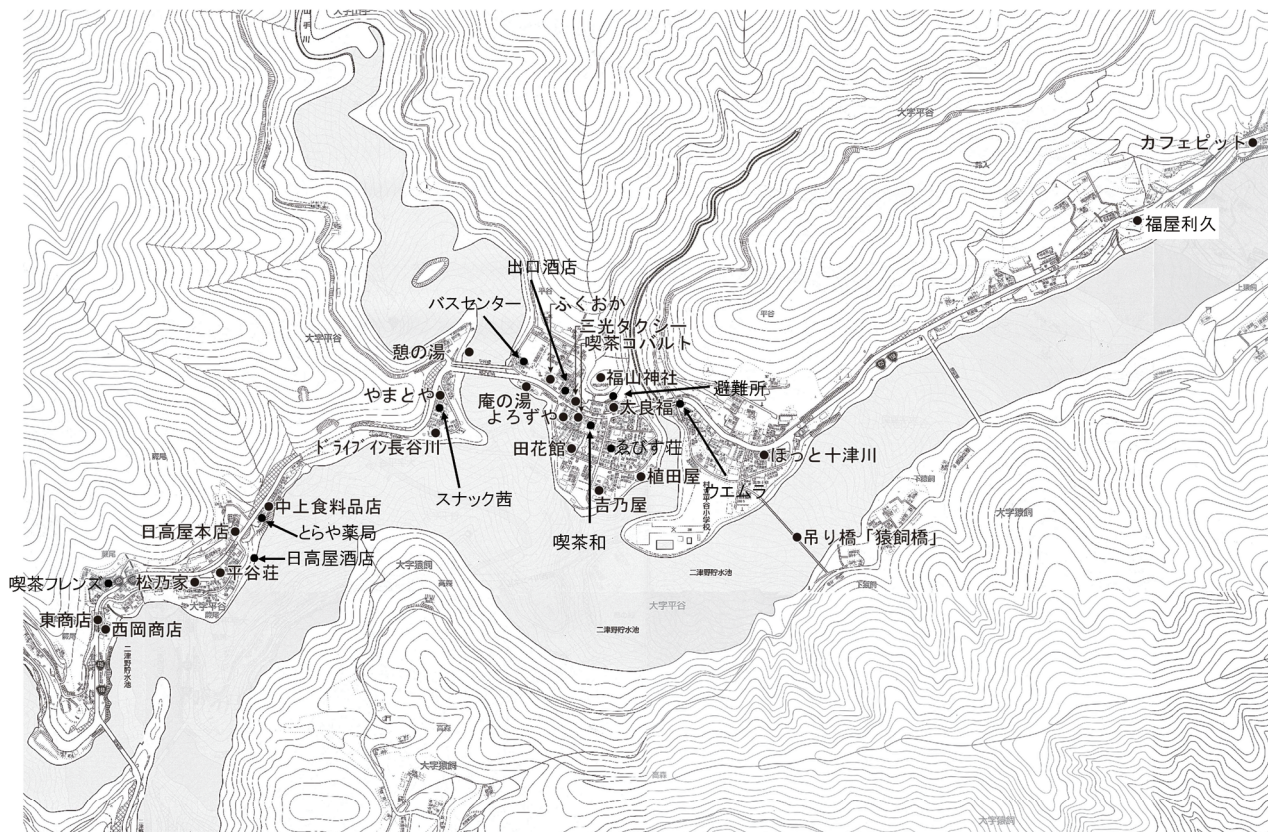


図16 十津川温泉街の概要

十津川村役場総務課が2014年に実施した十津川温泉（平谷地区）観光客アンケートより転載。「今回のアンケートで対象とする『十津川温泉（平谷地区）』は概ねこの地図のエリアを指します。」とされていた。下湯の源泉、昂の郷、および山水は、この図の範囲外である西方に位置している。



図17 「憩の湯」の建物

2019年3月29日，河本撮影。

い。ただし、主要部が段丘崖の下方にあり、入り口から階段を下ってたどり着く構造であるため、2011年の紀伊半島大水害では水没・破損など甚大な被害を受けた。

平谷公衆浴場は、垣内集落の「よろずや」付近にあった。役場資料によると1964年1月9日の許可を受け、同年12月1日に村が個人との賃貸契約を結び、管理等を大

字平谷に委託していた。しかし建物修繕等の目途がつかず、2001年3月31日の土地借用期限満了をもって廃止された。

わらびお公衆浴場は、蕨尾集落の国道168号線沿いにあった。隣に存在した「いでゆ食堂」が管理していた。昔ながらの湯治場の面影が残る素朴な浴場であった。蛇口は自分で調整できるため大量に源泉を投入できた。窓からは美しいダム湖と山々を眺めることができた。集落住民らから存続の要望が出されていたが、施設老朽化のため、2012年3月31日に廃止された。

図18は、2003年・2004年の公衆浴場実績（利用者数）をまとめたものである。当時、十津川温泉には星の湯、わらびお公衆浴場、憩の湯（ここでは南部老人憩の家と表記されている）があった。図中には、湯泉地温泉の滝の湯および泉の湯も含めている。連休等のある5月および8月に利用者が多いが、湯泉地温泉にある2つの公衆浴場に比べると十津川温泉の公衆浴場の利用者は少なかったことがわかる。わらびお公衆浴場および憩の湯は、地元利用者の多い公衆浴場であった。現在も、浴場をもたない家庭が大字平谷にはいくつもあり、公衆浴場は観光客だけでなく住民にも頻繁に利用されている。

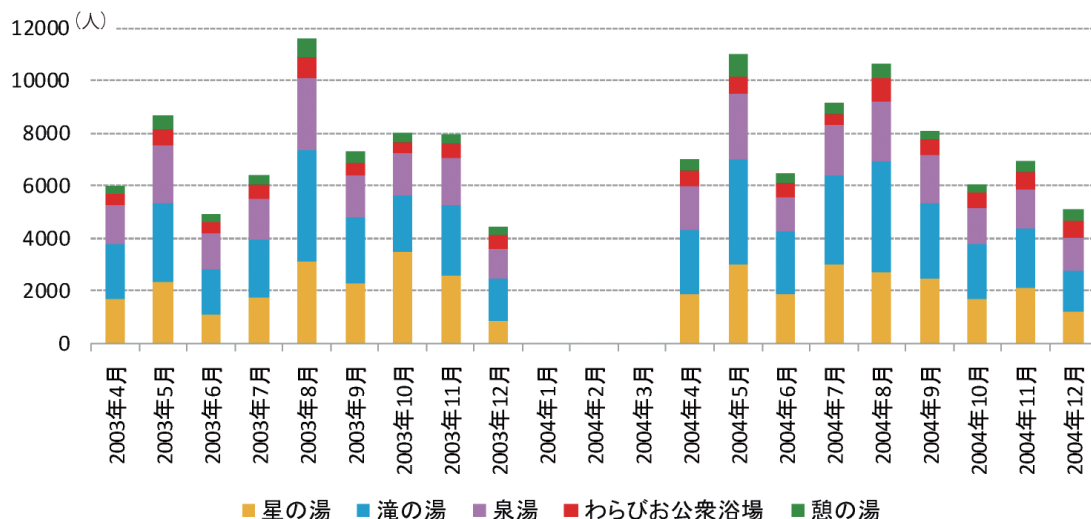


図18 2003・2004年の4月～12月における公衆浴場実積（人数）の比較

村報に掲載された資料により作成（1月から3月は記されていない）。

4.2. 宿泊施設

表1に、2017年現在の十津川温泉の宿泊施設9軒の概要を示す。参考までに、十津川温泉に近い上湯温泉の神湯荘もあわせて掲載している。収容人数の多い順である。2018年にオープンした「行者の宿 太陽の湯」は載せていない。左端のa～iは、後で個々の宿泊施設につ

いて述べる際に用いている。

上湯温泉の神湯荘を含む宿泊施設10軒のうち、ネット予約を利用しているのは半分未満である（表2）。ただ、情報化時代の到来によって、宿泊施設の検索はネット上で行われることが多いので、旅館側の対応と情報発信が不可欠になっている。

表1 宿泊施設の概要（2017年）

		部屋数	収容人数	創業年	日帰り入浴	経営者の年齢	従業者数	料金 (観光協会)	料金 (自社サイト)
a	ホテル昴	27	126	1989	可 (800円)	60代	10	14,000～	12,000～
b	吉乃屋	13	50	1924 (改築1996)	可 (700円)	40代	5	13,000～	15,120～
c	やまとや	17	45	1970頃	可 (500円)	60代	6	6,500～	7,200～
	神湯荘	13	28	1975	川原の大露天 風呂のみ可 (500円)	50代	5	12,000～	12,777～
d	田花館	9	30	1909	不可	60代	5	9,000～	9,870～ (税込)
e	山水	9	24	1975	可 (800円)	30代	5	—	12,800～ (税込)
f	松乃屋	6	23	1987	不可	40代	2	6,480～	7,000～ (税込)
g	平谷荘	6	20	1920頃	要予約	60代	2	11,000～	11,250～ (税込)
h	糸びす荘	7	16	?	不可	30代	1	8,500～	9,500～
i	植田屋	7	15	大正期 (改築1995)	可 (500円)	80代	3	9,000～	9,800～ (税込)

十津川村観光協会の資料、各施設のウェブサイト上の情報、現地調査により作成。

料金は1泊2食付きプランのものを税別で記載。自社サイトがない場合は楽天トラベル等の記載を参照。

表2 十津川温泉における宿泊施設の基本情報とネット予約利用状況

	全体	高額	低額	価格不明
宿泊施設	10	7	2	1
十津川村観光協会	9	4	5	1
旅行代理店利用	9	4	4	1
自社サイト所有	7	2	4	1
じゃらん	4	2	1	1
楽天トラベル	6	4	1	1

十津川村観光協会の資料，各施設のウェブサイト上の情報により作成。

以下では，表1のaから順に，個々の宿泊施設について見ていく。なお，ここでは上湯温泉の神湯荘はとりあげていない。また，2018年にオープンした「行者の宿 太陽の湯」についても最後に記す。

a. ホテル昴

ホテル昴は1989年（平成元年）7月20日に開業した宿泊施設である。運営主体は，第三セクターである十津川観光開発株式会社である。この代表取締役社長は村長が務めており，十津川村が55%，奈良交通株式会社が40%，十津川村観光協会が5%の割合で出資している。また，ホテル総支配人は，奈良交通から出向する社員が，第三セクターの常務取締役と兼務している。

ホテル昴は村が整備した「昴の郷」の中の一施設であり，先述の公衆浴場「星の湯」もここに位置する。他に1983年完成の多目的広場や，1986年完成の室内温泉プール等がある（図19）。

このホテルでは地元食材の利用を積極的に行っており，地元の業者からの食材の買い取りを行っている。2017年10月からは個人で栽培した野菜の買い取りも行っている。買い取ったものとしては，栗，八つ頭，こんにゃく，きのこがある。買い取った野菜は主に宿の食事として提供されるが，一部販売も行っている。

従業員は，時期によって数が異なるが約40人で，このうちの約8割はパートである。他に，繁忙期である8月や土日には，十津川高校の生徒3名程度がアルバイトをしている。従業員の6～7割は村内雇用で，残りの3割ほどは村外から通勤している。

図20は十津川温泉にあるホテル昴の2015年4月から2017年9月までの宿泊者数の推移を表している。宿泊者が多い月は3月，8月，11月，少ない月は1月，6月，9月である。3月は学校等の春季休業や企業等の異動前のイベントなどに使用されている。8月は学校等の夏季休業や，企業等の盆休みが影響していると考えられる。11



図19 「昴の郷」のホテル本館（左）と温泉プールの建物（右）

2019年3月29日，河本撮影。

月は紅葉が，1月は年末年始の休暇が影響しているものと思われる。6月は梅雨の季節，温泉に合わない時期であり，雨が多いため，小辺路歩きにおける危険性が高くなり，観光客が減って宿泊者数も減少する。9月の宿泊者が少ないのは，暑いこと，夏季休業明けであることなどによるとと思われる。

2019年3月末までの約30年間に，累計で約42万3千人が宿泊した。

図21で，ホテル昴の宿泊者を出発地から見ると，十津川村のある奈良県が27%，そして大阪府も27%と圧倒的に多い。これらに兵庫県，京都府が続く。関東地方や中部地方からの宿泊者も多く，全国区の施設になっていると言える。

ただし外国人の宿泊者は全体の2%ほどで，小辺路歩きの人がたまに泊まる程度である。外国人の宿泊者が少ない月もある。外国人の団体での利用は少なく，JICA（国際協力機構）経由や小辺路歩きの場合は田辺市熊野ツーリズムビューローを通じた予約が，年に1，2回ほどあ

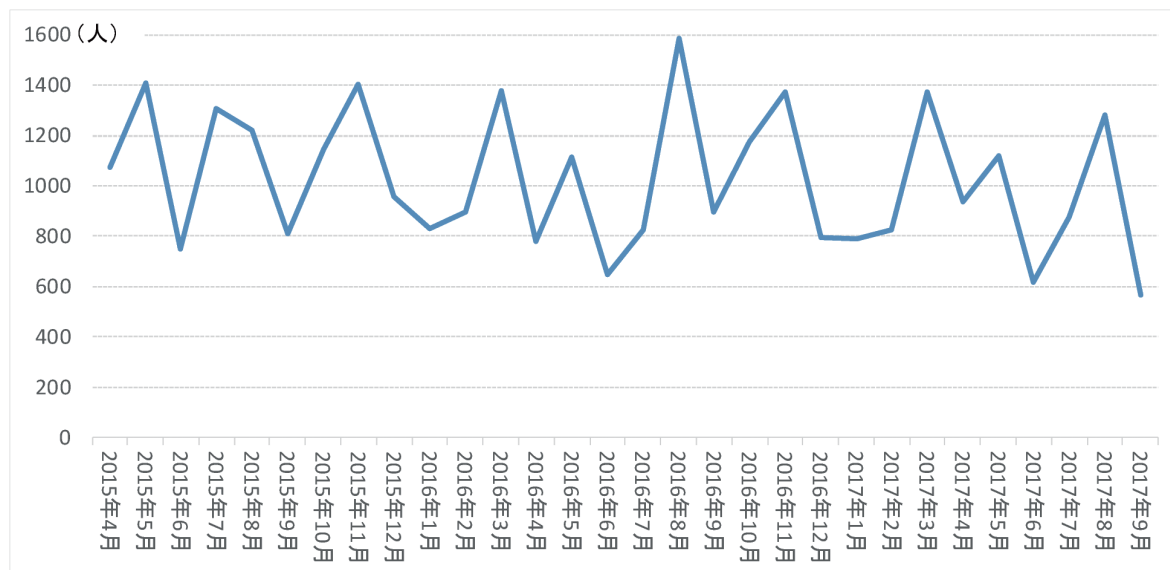


図20 ホテル昴の宿泊者数（月別）

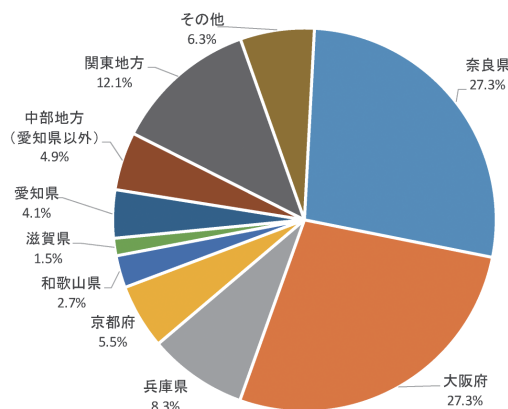


図21 ホテル昴の宿泊者（地域別） 2015年4月～2017年9月。

る。

日本人の利用客に関して、水泳の合宿で利用する高校生が多い。学校団体の補助金制度を利用した奈良県内の高校生団体（一条高校）が年1、2回来る。2～3月の冬場の利用が多い。合宿の他、一般の宿泊客の特徴として、中部地方はツアー客が多い。年齢層は幅広く、6～7割が60代以上である。宿泊客の目的は温泉よりも小辺路歩きが多い。

ホテル昴にはペットハウスもある。利用がない月もあるが、月4、5件ぐらいの利用がある。夏休みの利用が多く、ゲージがいっぱいになることもある。

開業後の大きな改装はないが、野外ステージが1998年に完成した。また、1995年～2003年の間に洋室2室がつけられた。

レストランについて、人員不足のため夜は宿泊者だけにし、一般の利用客は、昼のみ利用可能になった。また、日帰り入浴の時間も短縮し17時までとした。こうした営業時間の短縮の背景について、利用者の減少や、日帰り

入浴に関してはマナーの悪い日帰り入浴客が見受けられるから、他の公衆浴場が周辺地域にあるからといった理由が挙げられた。また、それだけではなく17時以降は宿泊に力点を置きたいという意向がある。

2011年の紀伊半島大水害について、ホテル昴は避難所として指定されていないが、公的色彩を帯びた経営であることから土砂災害の危険性の大きい集落の住民の滞在する場所としてその後もたびたび活用されることがあった。水害の直接的な被害はあまり受けなかったが、温泉が引けなかったため、2ヶ月間、もとあったボイラーで炊いて提供した。11月に再開し、12月には通常に戻った。

経営上の課題としては、従業員不足が挙げられる。従業員が高齢で退職した後、求人を出してもなかなか新たな従業員が集まらないのが悩みという。

2019年7月11日には、開業30周年記念式典が開催された。

b. 湖泉閣吉乃屋

1924年（大正13年）に大字折立で久保旅館として創業し、1935年（昭和10年）に現在地に移転して吉乃屋と改名した。その後、増築を重ねていたが、1993年8月13日に漏電による火災で全焼した。幸い宿泊客にけが等はなかったが、近隣への延焼もあったためそれらの再建を待って1995年7月13日にリニューアルオープンした。景観的にも目立ち（図22）、十津川温泉を代表する施設のひとつとなっている。

ウェブサイトでは、下記のように紹介されている。「家族的な雰囲気のある宿をモットーに田舎料理と館内には地元の山で採った花木と野草を飾りお客様をお迎えしております。」

施設としては、和室15室（うち10畳10室、12畳3室）



図22 吉乃屋の建物（中央左）はひときわ目立つ

2019年3月29日，河本撮影。

がある。全室から眺望ゆたかな二津野湖畔が見える。また、部屋の名前はすべて十津川村にある山脈、木、川の名前になっている。旅館の大広間宴会場では50名まで収容できる。

吉乃屋の主人は、SNS等を用いた十津川村関連情報の発信にも積極的である。

c. やまとや

十津川村観光協会のウェブサイトには、「家庭的な雰囲気とボリューム満点の料理が自慢」とある民宿である（図23）。以前は「大和屋」として別の家族が経営していたが、高齢化で難しくなったため、近隣で「ドライブイン長谷川」を営む人が2010年頃に継承し、改装した。食事はそのドライブイン長谷川で提供される。ドライブイン長谷川は釜飯が名物で、十津川村で最も古い飲食店（50年以上の歴史がある）とされる。女将によると、いつ頃から、釜飯メインの飲食店になったのかはわからないが、四国のおかみさんから釜飯の炊き方を伝授されたという言い伝えがあるという。現在も8割の利用客が釜飯を頼む。現在、ドライブイン長谷川では、やまとやの宿泊客以外の客には昼のみ営業している。地元でとれる良質な山菜をたっぷりと使った山菜釜めし定食はご注文を受けてから、炊き上げるので20分ほどかかるが美味しく待てる。リピーターも多く「何人で行くからと」「今～におるから〇〇炊い」として「前もって電話がかかるほど、ファンが多い店として知られている。夜は宿泊者のみ飲食可能で、宿泊者がどんな時間に来ても食事は断らないとしている。

従業員は1名社員、5名パートで、夏の1か月間は高校生2名が住み込みでアルバイトをしている。

現在（2017年）の経営者になってから、トイレを洋式にした、炊事場を宿泊部屋にした、部屋を5つ増やした、日帰り入浴を可能にした、といったように経営面で大き

な変化があった。

外国人利用客は他の宿泊施設と同様に欧米の人が多い。外国人利用客について、歓迎はしないけれど、断りはしないとしている。

日本人の利用客に関して、利用客の7割は仕事関係（災害復旧現場関係）である。工事の方が1か月以上滞在することもある。工事現場が近くにあると忙しくなる。工事関係者以外の利用客の多くは小辺路歩きを目的として来られる方が多い。

小辺路歩きや中高生のスポーツ合宿として夏から秋にかけての利用客が多いのがやまとやの特徴である。中高生のスポーツ合宿での利用客は、十津川温泉地域で比較的規模が大きい宿泊施設と言える、やまとやとホテル昴に集中する。やまとやでは特に高校生（バレー、剣道、水泳）の利用が多い。1週間50名が宿泊したこともある。やまとやのウェブサイトには「合宿でのご利用」のページが設けられている。ドライブイン長谷川の中にある40人ほどが集まれる広々とした座敷を合宿の際のミーティングに使用可能となっている。氷のサービス・冷蔵庫・洗濯機・乾燥機の無料貸し出し、弁当を作るサービスや夏季は体育館等にお昼頃配達サービスが行われており、ウェブサイトでも紹介されている。合宿の際利用する施設に関しては、やまとやから徒歩15分の場所にホテル昴の温泉プールがある。冬場も利用可能な温泉プール



図23 やまとやの外観

2017年10月7日，河本撮影。

となっており、冬季の水泳合宿や合宿中のレクレーションとしても利用可能である。また、車で15分のところに十津川村体育文化センターがある。ここは、剣道・バスケットボール・バレーボール・バドミントン・卓球等ができる体育館となっている。

やまとやは、工事現場関係、小辺路歩き、合宿等、利用客の目的が多岐にわたっており、民宿、飲食店ともに定休日はない。365日、常に宿泊客がいるという。

2011年の紀伊半島大水害発生時には、風呂はボイラーで炊いて提供していた。

ただし、高齢者に配慮した設備については金銭的に整えるのが難しいとしている。建物の老朽化が経営上の悩みとなっている。

d. 田花館

田花館は1909年に創業した。ウェブサイトには、「明治四十二年に創業以来田花館は湯宿の心を今日まで伝えてきました。体だけでなく心もほっこり暖めるお湯と料理の真心を・・・こころゆくまでおくつろぎください。(中略)田花館では、十津川温泉の源泉温度が高いため、自家製熱交換器で源泉率100%に保っています。温泉が通るパイプに湧き水をシャワー状に注ぎ冷ましています。」「十津川温泉田花館は奈良県十津川村にある源泉かけ流し温泉が自慢の100才を迎える歴史あるお宿です。」などと記されている。

従業員は5名で、うち1名が高校生のアルバイトである。

田花館は、村道を挟んで二津野ダム湖のほとりにある(図24)。1889年8月の大水害後、村民は、後世子孫のためにと、各所に増水した地点を示す警戒碑を建てた。現在村内に残っているのは5箇所だけで、うち1つが田花館前にある。また、2011年の台風12号による紀伊半島大水害の際には、他の宿泊施設と同様に温泉水が届かないという問題が生じた。また、雨漏りにも苦労したという。4代目社長(現社長)は2007年に十津川村観光協会会長に就任していたため、導湯設備の再構築など十津川温泉の温泉地としての復興等に尽力した。

田花館は外国人利用客が多い旅館で、特に欧米からの利用客が多い。外国人利用客の大半の目的は小辺路歩きである。こうした外国人利用客への対応に関して、多言語表記は行っており、差し迫って対応を考え直さなければならない点は今のところない。源泉かけ流しの温泉や料理が魅力的な旅館であるが、外国人利用客は裸でお風呂に入ることに抵抗があり、朝風呂をする人は少ない。肉も魚もダメというベジタリアンの外国人がいる。その他、外国人利用客に関して、年に1回ほど道に迷った外国人を迎えに行くことがある。

日本人の利用客に関して、山歩きの利用客は朝7時半



図24 田花館から望む二津野ダム湖

2017年10月8日、河本撮影。

にチェックアウトする。近年では関東、東京近辺の女性客が多い。また、小辺路歩き以外の目的として、玉置神社が目的の利用客が近年(水害後)多い。

建物は、1909年の創業から現在に至るまで増改築を重ねてきた。階段には手すりを設けているが、建物内には段差が多く、バリアフリー化をするには建て替えないと厳しい現状にある。

経営上の悩みに関しては、時代の流れについていかなければならず、ニーズにこたえるにはどうすればいいのかわからない、施設をよくしたいがターゲットをどこにすればいいのかわからない、カード支払いを頼む客がいるが取り扱っていないといった悩みが挙げられた。

また、今後の経営方針や十津川温泉のこれからについて、温泉や自然を守ることが第一と考えている。旅館経営者の願いとして、十津川温泉全体の活性化が挙げられた。田花館のある垣内には現在小中学生がゼロであることから、十津川温泉のこれからについて、次世代の人がしっかりしてほしい、活気と風情のある十津川温泉にするために、シャッターを閉めず、ほかの宿も頑張ってもらいたいと述べている。地域の活性化の取り組みは失敗をおそれないことや、十津川温泉活性化協議会が行うのれんラリーの継続が大切であることも挙げられた。その他、荷物送迎の業者が十津川温泉にも普及してほしいと考え、ピラを作ろうとしている。

図25・26は、2016年および2017年の各月の宿泊組数である。年による違いは大きいものの、春と秋の宿泊者が多く、気象条件の悪い2月や6月に落ち込む傾向が見てとれる。また、男性の宿泊者が約7割を占めていることがわかる。

e. 山水

十津川村大字風屋出身の経営者が、岐阜県高山市奥飛騨温泉郷の「風屋」,「風雪」,「静響の宿 白雲荘」,「中

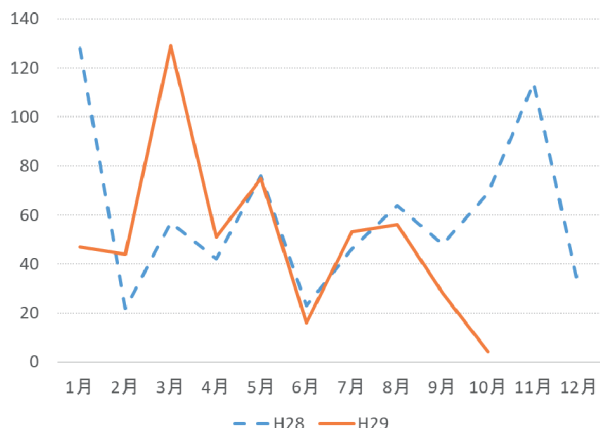


図25 田花館の宿泊組数（月別）

宿帳（宿泊者名簿）から2016年1月1日～2017年4月3日のデータを用いて作成。H28は2016年、H29は2017年である。

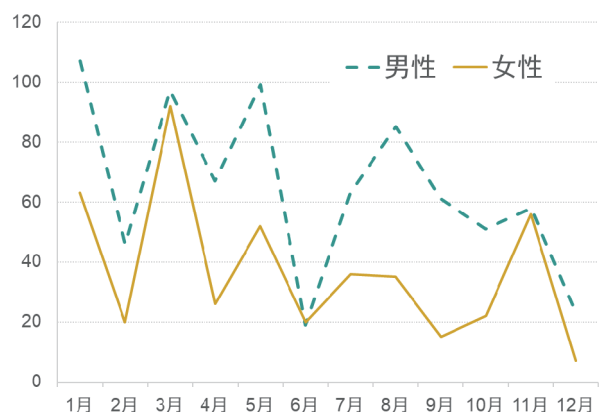


図26 田花館の宿泊組数（男女別・月別）

2016年・2017年の合算。ただし2017年10月4日～12月31日のデータは含んでいない。

尾高原ホテル 風車」，そして十津川村「山水」の計5つの宿泊施設によるKazeya Group（風屋グループ）を展開している（2019年10月現在）。以前は地元の経営者によるものであったが，高齢化等のため経営が難しくなり，2007年に現経営者の強い思いにより風屋グループが継承した。このような経緯と状況から，現時点では十津川村観光協会には入らず独自路線を歩んでいる。

山水は十津川温泉の源泉である下湯から約300mの上湯川沿いという立地で（図27），源泉に最も近い位置にある宿である。湯の質・温度・鮮度が保たれているのが自慢で，高温のため敷地の湧き水を混ぜ込むが，肌に優しく湯冷めもしないのが特徴という。料理や自家栽培植物への水もすべて湧き水を利用している。料理はすべて国産の食材を用いており，なるべく地元食材を積極的に活かそうとしている。特にマス・アユ・アマゴ等の魚は村内の業者から仕入れている。



図27 上湯川に面した山水の露天風呂

2018年5月24日，河本撮影。

2011年に発生した紀伊半島大水害では，すぐそばを流れる上湯川が氾濫し，人的被害はなかったものの露天風呂施設が流失するなど施設には大きな被害があった。翌年，水害の影響を受けないように，露天風呂を従前よりも高い位置に再築した。あわせて旅館を改装し，一部の部屋にあったユニットバスをなくして源泉かけ流しの風呂のみにしたり，カラオケ部屋を廃止したり，一部の部屋を食事用や従業員用にして宿泊用の部屋数を少なくしグレードアップしたりした。

従業員は5名で，うち2名が外国人である。その2名は他の宿泊施設で働いていたが，山水の従業員が不足していたため，風屋グループが配置転換を行った。

宿泊者は，ゴールデンウィークに訪れる日本人が多い。平日は小辺路歩きなどの目的をもつ外国人の利用客が増えている。宿泊者の大半は，じゃらん，楽天などの旅行会社のサイトで予約している。

f. 松乃家

松乃家は，大字迫西川から1978年に転居した経営者が，1985年頃に現在の自宅で温泉民宿として営業を始めたものである。1988年に，かつて映画館であった場所に宿の建物を増築した後，現在に至るまで改築はほとんど行われていない。

ウェブサイトでは，「世界遺産熊野古道『小辺路』の果無峠登山口に近い温泉宿です。果無集落・玉置神社・熊野本宮大社へのアクセスにも便利です。観光・登山・一人旅・ビジネスなど幅広くご利用いただけます。」「源泉かけ流し」当宿自慢の貸切展望露天風呂からは，果無山脈と二津野湖畔が四季折々の表情を見せてくれ，夜は輝く星空が心も体も包み込んでくれます。」等と記している。

従業員は経営者親子2人である。また，ほかに1人が清掃業務に従事している。十津川高校の生徒がアルバイト

トをしていたこともある。特に1990年頃までは多い時で4人ほどがアルバイトをしており、うち2人は西川区の生徒で下宿を兼ねていたという。

2011年の紀伊半島大水害発生時は、ほとんどの宿泊施設が休業した中でも営業し、トンネルや橋梁、ケーブルテレビ等の復旧・復興工事の関係者が多く宿泊していた。風呂に温泉水は使えなかったが、ボイラーで沸かしていたという。

宿泊客の中心は日本人で、特に60、70歳代のシニア層に特に好まれているという。春季・秋季の宿泊客が多く、小辺路歩きを目的としている場合が多い。申し込みの大半は、楽天と自社サイトである。外国人の利用客も、ウェブサイトが英語、中国語（簡体字・繁体字）、ハンデルに対応しているため頻繁に訪れる。東アジアと欧米系の20、30代の若い人が多いという。外国人利用客の大半の目的は小辺路歩きである。

屋上の露天風呂から二津野ダム湖や山々を眺めることができるのが売りとなっている（図28）。露天風呂は、2019年の7月から8月にかけて改修した。



図28 景観を売り物にしている松乃家の露天風呂
2019年8月26日、河本撮影。

g. 平谷荘

平谷荘は、1920年頃（大正末期）に「地案旅館」として同じ大字平谷の蔵尾で創業したが、二津野ダム湖に水没することとなり、現在の国道169号沿いの敷地に移転し改名した。1960年頃築の既存の建物を修繕し、1968年頃に温泉旅館として開業したという。

夫妻で経営しており、手作りの料理が好評である。建設業をあわせて営んでいた主人は、十津川村をはじめとする歴史に詳しく、宿泊客との歓談を好む（図29）。ウェブサイトでは、「古くからの小さな旅館ですが、家庭的なおもてなしを心掛けて居ります」等と述べられている。

浴場と客室からダム湖や山々の風景を眺めることができる。露天風呂は1990年頃に設置されたものである。



図29 平谷荘の主人と筆者ら
2018年7月22日、藤重季恵氏撮影。

h. えびす荘

ウェブサイトでは、「十津川村の無農薬野菜や十津川村の食材を使用する地産地消の宿です。こじんまりとした小さなお宿の館内には多くの野草や生け花が飾られています。満天の星空を見ながらの源泉かけ流し温泉は至福のひとつです。」「奈良県十津川産無農薬野菜が体に優しい、オーガニック料理と源泉かけ流し温泉のえびす荘玉置神社参拝の宿として参拝メニューもあり。館内には十津川かづらアーティスト原秀雄さんの作品で癒しの空間。花いっぱいのかどわり女将の宿。」などと紹介されている。

図30に「YASAI KU-O-RA !!」（野菜 食おうら!!）と記されているように、自家菜園等でとれた野菜など十津川産の食材を用いた料理とそのみせ方にこだわりがある。



図30 えびす荘の玄関
2019年3月29日、河本撮影。

i. 植田屋

大正期に創業した宿で、十津川温泉導湯前から平谷の垣内の繁華街の旧国道沿いで営業してきた(図31)。ウェブサイトでは、「ダム湖を前に源泉かけ流しの温泉とぼたん鍋が自慢の家庭的なお宿です。」と紹介している。高齢の夫妻で経営している。

図32・33はともに2016年(H28)および2017年(H29)の宿泊者実績を示したものであるが、図32は大手旅行予約サイトからの予約、図33はそれ以外を用いている。男女別がわかるのは図33のデータのみである。3月および



図31 植田屋の外観

2017年10月7日、河本撮影。

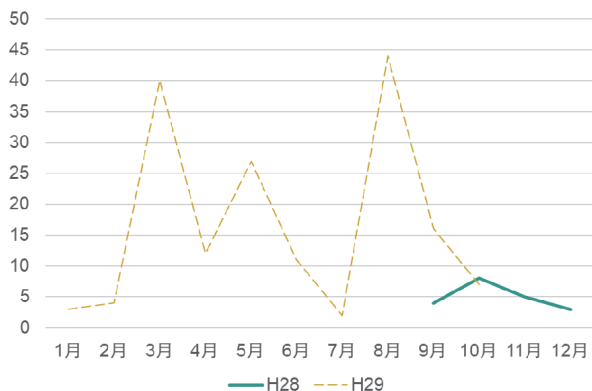


図32 植田屋の宿泊組数(月別)

大手旅行予約サイトからの予約のみ。宿帳(宿泊者名簿)から2016年9月1日～2017年10月30日のデータを用いて作成。H28は2016年、H29は2017年である。

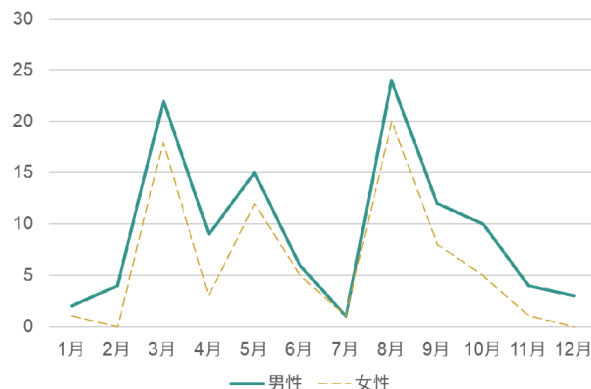


図33 植田屋の宿泊組数(月別)

自社での予約のみ。宿帳(宿泊者名簿)から2016年1月1日～2017年12月31日のデータを用いて作成。H28は2016年、H29は2017年である。

8月に宿泊客が多いことがわかる。また、男性客が女性客の数を上回っている。

j. 行者の宿 太陽の湯

2018年11月に開業した宿泊施設である。十津川村大字折立に本社を置き、奈良市を拠点に福祉サービス業等を行ってきた株式会社エース(1981年設立)が経営している。

施設の前身は、高齢夫妻が経営していた温泉旅館「湧山荘」である。休業後、6階建ての建物は10年間ほとんど使われていなかった。施設が老朽化していたことなどから、営業許可を取得するにあたって建築基準法や消防法など関連法令の様々な基準を満たす必要があり、リノベーション等を含め開業まで約2年かかった。

村の地域活性化の手段として機能訓練を利用してはと考え、1階に「ふれあいサロン太陽わらびお(機能訓練設備付きデイサービスセンター)」を併設している。

比較的安価でフレンドリーな宿を目指している(図34)。

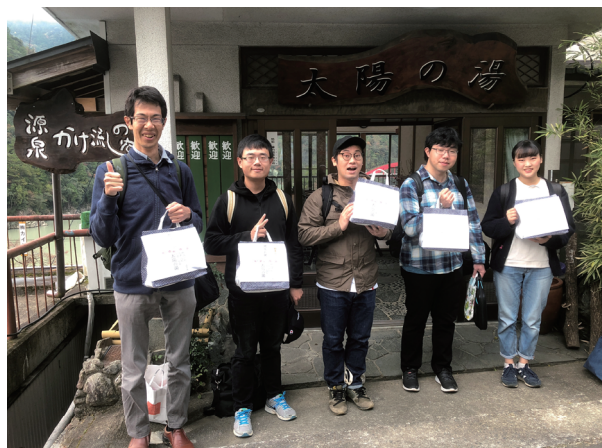


図34 「太陽の湯」では開業後3組目の客となった

2018年11月5日、従業員様撮影。

4. 3. 観光客の行動と意識

観光客の行動と意識について、十津川村役場総務課が2014年に実施した十津川温泉（平谷地区）観光客アンケートの結果を参照した。

図35からは、十津川温泉は、国道168号線を通じて南隣の和歌山県田辺市本宮町にある熊野本宮や、さらに南の那智勝浦町などとあわせてまわる観光客も多いことがわかる。十津川村内では、村北部にある国道168号線に近い谷瀬の吊り橋を、過半数があわせて訪れている。また、十津川温泉のある村南部については、山上にある玉置神社や、果無集落、瀨峡などを訪ねるための拠点となっていることがわかる。

図36からは、観光客の多くが十津川温泉（平谷地区）に「温泉」を主目的として来ているものの、「温泉地の雰囲気」に満足していないことがわかる。この温泉地は前述のとおり、もともと十津川村の商業・サービス業の中心地で人口も多い平谷地区中心部に、導泉して成立し

ている。したがって、情趣を重んじた景観形成はあまりできておらず、建築や看板、法面工事等に温泉地としての景観を強く意識した統一性はさほど見られない。景観を規制・誘導する条例もない。そのことが表れていると考えられる。他の項目からも、温泉地を歩いて楽しみたいという希望が読み取れる。また、地場産品を購入できる場が限られていることも不満として表れている。

なお、上記のアンケート結果は単純集計しかおこなわれておらず、十分に分析されているとはいえない。今後、観光客の属性が行動や意識とどう関わっているのかなどをクロス集計によって明らかにしたほうが、温泉地としての十津川温泉の未来に資すると思われる。

4. 4. 温泉地としての地域づくり

十津川温泉では現在、比較的若手の宿泊施設経営者や店舗経営者などからなる十津川温泉活性化協議会が、大字平谷の総代を代表として組織されている。ここでは、

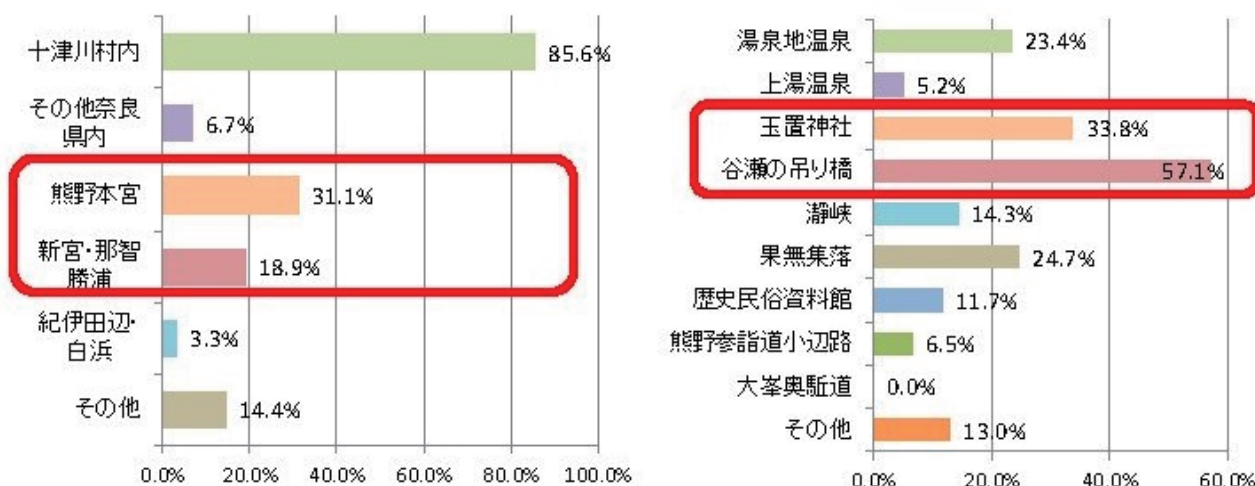


図35 十津川温泉の観光客があわせて来訪している場所 (左, N=90) と十津川村内における来訪場所 (右, N=77) 十津川村 (2019) より転載。

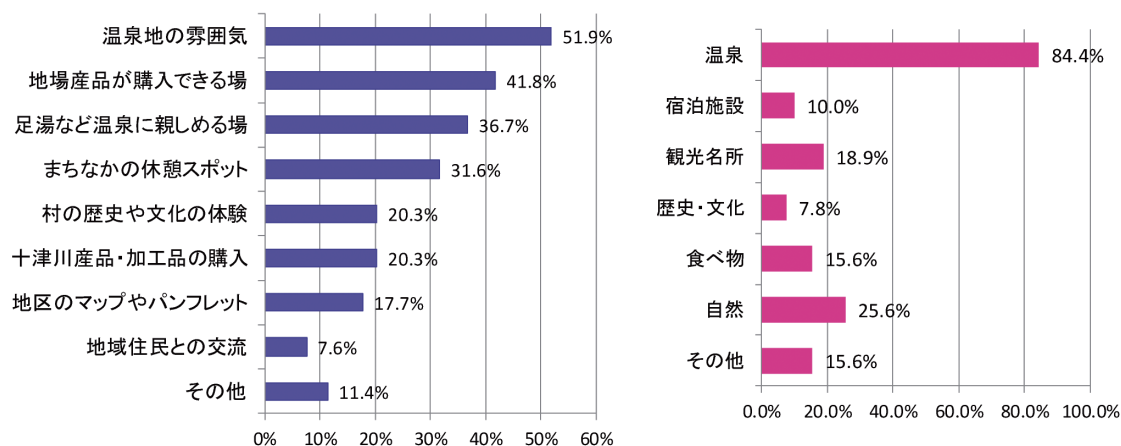


図36 十津川温泉の観光客が平谷地区に求めるもの (左, N=88) と重視したこと (右, N=90) 十津川村 (2019) を用いて作成。

温泉地としての雰囲気醸成するべく各店舗・宿泊施設にのれんを掲げてそれをめぐるスタンプラリーを開催したり、温泉街の多くを構成する垣内・垣平・蔵尾の3集落の知られざる見どころを面白おかしくまとめた「三丘（さんきゅう）マップ」を作成したりと、新たな動きが創出されている。

2017年4月には、農協の跡地に平谷地区地域交流センター「いこら」が開設された。村民や観光客が集い交流できる施設となっている。ここでは曜日によって異なる店舗が営業しており、2017年7月時点ではラーメン・焼き飯の「ヌードル屋『輝（てる）』」、手作り菓子や野菜などの「十津川 四季の食彩『たまちゃん』」、若い母親らがランチやケーキセットを出しキッズコーナーもある「café cedar（カフェ・シダー）」、ぼん菓子や野菜を販売し足湯を使ったマッサージも行う「一十業（ひとわざ）」、西川区の住民が新鮮野菜を販売する「西川朝市の会」、手作りパンや山菜ちらし、きのこごはん、パウンドケーキ等を販売する「ノブちゃんのお店」があった。その後、「輝」が近隣に独立店舗をもつに至るなど、ここはチャレンジショップとしての機能を有している。また、交流室や集会室は各種教室などのイベントにも用いられている。足湯は観光客が気軽に立ち寄れる場所として人気である。

また、2019年3月には、奈良県と十津川村との間で「奈良県と十津川村とのまちづくりに関する包括協定書」が締結され、十津川温泉のある平谷地区、および谷瀬の吊り橋のある谷瀬地区に焦点をあてた取り組みが行われつつある。「十津川村平谷地区まちづくり基本構想」には、同地区が「十津川村の観光、暮らし、居住の重要地である」こと、「十津川街道や熊野本宮に至る小辺路等の主要観光ルート上にある」こと、「温泉の効能は優れているが、温泉街としての佇まいが不足している」こと、「交通の結節点であり、生活サービス機能の集積がある」こと、「住民による活性化の取組」の5つが挙げられている（十津川村、2019）。そしてそれらをもとに、「暮らしと温泉が息づく活力ある地域づくり」をコンセプトとする取り組みが、構想図とともにまとめられている。

2019年4月には、十津川温泉バスセンターの横で古くから営業しているコミュニケーションストア「ふくおか」において、レンタサイクル（電動アシスト自転車）の利用が可能になった。

2019年6月28日には「第15回日本源泉かけ流し温泉サミット」が十津川村で開催され、源泉の湯を循環させない「かけ流し」の魅力がさらに全国に発信された。

5. おわりに

本研究の目的は、奈良県吉野郡十津川村にある3つの温泉地のうち十津川温泉について歴史と現状をまとめ、今後活かすことであった。特に個々の宿泊施設の経営に焦点を当てた。

結果として、1963年の大字平谷の中心部への下湯からの導湯は、ダムや自動車道の建設される前から十津川村の商業・サービス業機能の中心地であった大字平谷の経済のその後に、大きく貢献したと言える。もし導湯事業がなされていなかったら、村外からのこの地への集客はきわめて限定され、宿泊施設の多くは廃業を余儀なくされていたと思われる。また、玉置神社や果無集落、瀨峡など十津川村南部の観光地への来訪も少なかったと考えられる。世界遺産登録された熊野参詣道（熊野古道）小辺路を歩く来訪者の滞在にも十分対応できていなかったろう。公衆浴場は当然存在し得なかったし、本稿ではほとんど触れることのできなかった小売業や特産品開発も低調な状態であったことが想像される。十津川温泉の存在は、十津川村における創業の機会や雇用の場の創出につながっており、きわめて重要であると言える。

本稿は、村史編纂のための調査における一応の成果物としてまとめたものであるが、現存しない宿泊施設の詳細を記していないなど、課題は山積している。今後、資料の追加等をおこない内容を充実させたい。

付記

本研究は、十津川村史編纂事業の一環として、十津川村教育委員会のご協力を得て実施しました。現地調査にてお世話になりました、十津川温泉に関係するみなさまに、特に長時間の聞き取りにご協力いただきました宿泊施設等のみなさまに、厚くお礼申し上げます。また、学芸員の藤重季恵さまをはじめとする十津川村教育委員会のみなさまにも、調査の便宜を多々図っていただきました。感謝申し上げます。

本研究は基本的には3名で実施し、現地調査は全員で行いました。一部については、同時に研究を進め松野・河本・馬（2019）をまとめた松野哲哉、伊藤・河本・馬（2019）をまとめた伊藤拓海（いずれも奈良教育大学大学院生）らとともに調査し議論しました。

執筆は、馬が第1章・第2章・第3章を、劉が第4章を担当した後に、河本がそれらを加筆修正し全体をとりまとめました。

なお、本稿の骨子は、2019年2月3日の十津川村史編さん委員会報告会「語ろう伝えよう十津川村 一村の学校・温泉編一」（於：平谷地区生活改善センター）にて発表しました。



図37 十津川村史編さん委員会報告会にて、馬の発表。

引用文献

- 伊藤拓海・河本大地・馬 鵬飛 (2019)：奈良県吉野郡十津川村大字上湯川にあった小中学校 (1875～1970年) に関する調査報告。奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 5, pp.321-326.
- 上治寅次郎 (1959)：奈良県十津川温泉について。温泉科学, 10-2, pp.29-32.
- 浦 達雄 (2001)：山間温泉地における小規模旅館の経営動向—黒川温泉, 長湯温泉を事例として—。大阪明浄大学紀要, 1, pp.1-10.
- 鬼塚健一郎 (2015)：都市住民の農山村地域との血縁関係が農山村地域や居住地域への関心に与える影響—Webアンケート調査データを用いた統計分析を通じて—。農村計画学会誌, 34, pp.249-254.
- 河本大地・劉 丹・馬 鵬飛 (2018)：山間地域におけるグリーンツーリズムと世界遺産観光の持続可能性—熊野古道 (小辺路) の通る奈良県十津川村神納川区の事例から—。奈良教育大学紀要, 67, pp.91-103.
- 小森美紗子・十代田 朗・津々見 崇 (2010)：温泉地の盛衰に関する基礎的研究。都市計画論文集, 45, pp.409-414.
- 田畑暁生 (2016)：村の地域情報化政策。神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 10, pp.117-125.
- 十津川村 (1960)：『森林開発公団林道竣工記念 1960.12.11』十津川村。
- 十津川村 (2014)：『紀伊半島大水害—平成23年台風第12号による災害 十津川村の被害と復興への記録—』十津川村。
- 十津川村 (2019)：『十津川村平谷地区まちづくり基本構想 別紙2』十津川村。
- 十津川村役場総務課編 (2010)：『年表 十津川120年 第4版』十津川村。
- 奈良県総務部知事公室防災統括室 (2013)：『紀伊半島大水害の記録』奈良県総務部知事公室防災統括室。
- 西村 進 (2000)：紀伊半島における前弧火成作用と温泉。温泉科学, 49, pp.207-216.
- 野本晃史 (1968)：温泉開発による温泉集落立地変化の地理的考察。地理科学, 10, pp.9-22.
- 林 宏 (1994)：『林 宏 十津川郷採訪録 民俗3』十津川村教育委員会。
- 藤本高志 (2000)：山村地域における観光の経済効果の計測。農林業問題研究, 36-3, pp.124-133.
- 平凡社編 (1981)：『日本歴史地名大系 第30巻 奈良県の地名』。平凡社。
- 堀井甚一郎 (1961a)：概観。奈良県教育委員会事務局文化財保存課編『十津川』奈良県吉野郡十津川村役場, pp.1-36.
- 堀井甚一郎 (1961b)：平谷。奈良県教育委員会事務局文化財保存課編『十津川』奈良県吉野郡十津川村役場, pp.156-168.
- 松野哲哉・河本大地・馬 鵬飛 (2019)：山間地域における1960年代の「へき地教育」の性格—奈良県十津川村の大字出谷の事例を中心に—。奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 5, pp.175-184.
- 村瀬房之助 (1997)：山村観光に関する研究—大分県, 宮崎県の動向—。林業経済研究, 43-2, pp.101-106.
- 向平知絵 (2011)：過疎地域における保育の実態と課題—奈良県十津川村のへき地保育所を事例に一。現代社会研究科論集, 5, pp.77-94.